

くまもとのその日の動きをナイスキャッチ!

みどりの周波数

RKK

熊本放送

熊本市山崎町30 TEL 328-5511(受付案内)

新キャスターは息もピッタリ、フレッシュコンビ!  
RKK ニュースキャッチャー

●よる6時30分～6時56分(月～金曜日)  
キャスター/二子石隆アナ、橋本晴美アナ

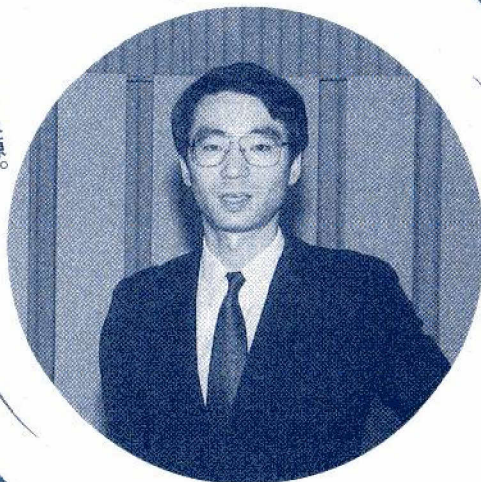
その日の動きをリアルタイムでお届けします。



役立つ情報、身近な話題をたっぷり集め、くまもとの

「ニュースキャッチャー」は、まさに地元の皆様の情報源。

その動きをリアルタイムでお届けします。



# 第九

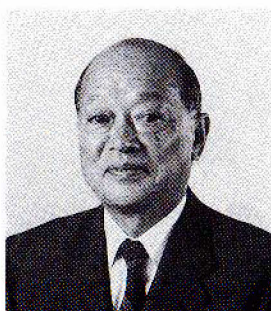
第10回

平成3年12月23日(月)午後6時30分

熊本県立劇場コンサートホール

主催:熊本県・(財)熊本県立劇場・県民第九の会・熊本県文化協会





熊本県知事  
福島 譲二

「県民第九の会」の演奏会が開催されますことを心からお喜び申し上げます。

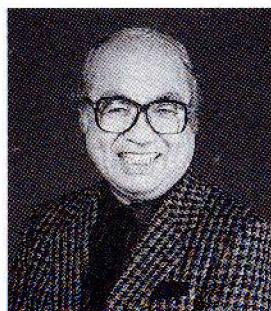
恒例となりましたこの「ベートーヴェン作曲第九交響曲」の演奏も、上演ごとに、聴く人たちに感動を与えながら、早くも10回目を迎えました。

今年も多くの方々がこの演奏会を楽しみにしておられることと思います。

これも第1回から御指導頂いている有馬先生をはじめ実行委員会の方々、また県立劇場の完成を記念して設立されました「県民第九の会」の皆様方の溢れる情熱の賜と深く敬意を表します。

今年も300人余の合唱団のメンバーの方々、熊本交響楽団と共に、日頃の練習の成果を十分に発揮され、その美しいハーモニーが観客の方々を魅了することでしょう。

演奏会の御盛会を祈念いたします。



熊本県立劇場館長  
鈴木 健二

日本時間1990年10月3日早朝、地球の裏側のドイツは深夜。ベルリンのコンサートホールでは、生涯最高の歓喜をライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団が奏でていました。指揮は、クルト・マズア。日本でもお馴染みのアーティストです。

午前0時の時報とともに、45年間の悲しみに別れを告げ、ドイツは統一しました。旧帝国議会議事堂前の共和国広場では黒、赤、黄色の3色旗が、打ち振られ、花火が上がり、いつしか歓喜の歌は、ドイツ国歌にかわり、人々は抱き合い、とめどなく涙を流しました。私は、この時ほど「ベートーヴェン第九交響曲」が人類の喜びにふさわしい曲であると思ったことはありませんでした。

「人生は感動なしには生きられない。」というのは、私が63年7月1日、ここ熊本県立劇場に就任した日に申し上げた言葉ですが、まさにこの日のクルト・マズアは、感動の頂点にいました。

日本では、いつの日からか、年末の一日は「第九」を聴いて過ごすというのが、日本人のライフ・スタイルになっていますが、特別な日には、「第九」を聴きたいという気持ちは、ドイツ人も日本人も共通した感動です。

今年で、10回目を迎えた「県民第九の会演奏会」を、どうか心ゆくまで、お楽しみ下さい。



熊本県文化協会会長  
三浦 洋一

県民第九の会の演奏会がいよいよ第10回を迎えました。この10年の歩みは有馬俊一先生を中心にした実行委員会の皆さんのひたむきな情熱と、熊本交響楽団の熱演に支えられてきました。

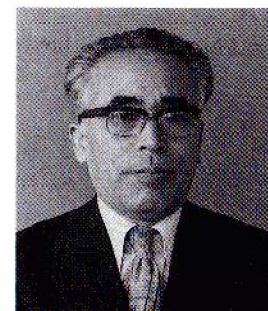
毎年中央からは勝れた指揮者と独唱の方々を迎えておられますが、それは何よりも地もとの皆さんの熱意と精進に応えてのことだと思います。

この10年は世界的にも歴史的にも多事多端な年でした。1年が過ぎるのが驚くほど早く、10年も短く感じられます。しかし外の出来事ばかり心を奪われていては何も生みだすことができません。

むしろこういう時代であるからこそ高いところ、深いものを目指して仕事を積み重ねなければならないでしょう。また生活を質的に豊かなものにしたいと思います。

昨年の第九回演奏会は感動的でした。力を出し尽すことが何と素晴らしいことか、それが大きな感動を呼びおこした引きがねになりました。

数百名の応募者から選ばれた県民の声が歳末の熊本に響きわたる日が楽しみです。惜しみない拍手を贈りたいと思います。



県民第九の会実行委員長  
有馬 俊一

本日はご来場下さいまして有難うございます。おかげ様で第九演奏会は第10回を迎えました。昭和57年に県立劇場の完成を祝って開催した第1回から、毎回満席のお客様がおい出下さいました。その皆様方のご支援で今日まで続けることが出来たものと心からお礼を申し上げます。

近年の第九ブームで、年末だけでも全国では200回を超える第九演奏会が開かれると聞きます。大部分はプロの交響楽団とアマチュア合唱団という組み合わせですが、熊本では熊響があるおかげで、オーケストラもコーラスも地元の人達で演奏することが出来ます。熊本の間で第九、戦前には考えられなかったことで、音楽水準の向上に隔世の感を禁じ得ません。

合唱団の公募には県下全域から毎年300名以上の応募がありました。大部分は音楽関係以外の人達です。年令も職業も違う人達が声を揃え心を合わせて歌う第九です。アマチュアですから限界がありますが、安永先生の卓越したご指導と熱意で、感動的な第九にしたいと願っています。

「すべての人間は兄弟になる」と謳う人間讃歌を、このホール一杯に響かせましょう。未熟なところをご寛容下さいまして、温かいご声援をお願い申し上げます。

心より出ず、願わくば心に還らんことを

………ベートーヴェン



指 揮 安 永 武一郎

独 唱 ソプラノ 西 森 由 美子  
メゾソプラノ 木 村 宏 子  
テノール 田 中 誠 吾  
バリトン 宮 原 昭 吾

合 唱 県民第九の会合唱団  
合唱指揮 林原隆治  
ピアノ 古閑恵美  
真田真澄

管弦楽 熊本交響楽団



平成2年12月23日<県民第九の会演奏会(指揮=靱山 和明)>から

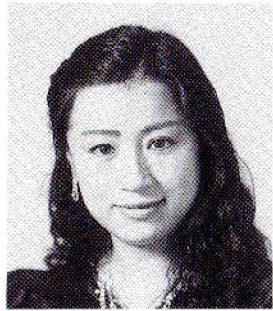


指 揮 安 永 武一郎 (やすなが たけいちろう)

- 昭和19年 東京音楽学校(現東京芸大)卒業
- ◇ 27年 文部省派遣、東京芸大ピアノ科終了(内地留学)
- ◇ 40年 文部省派遣、在外研究員としてウィーン国立アカデミー指揮科に留学、スワロフスキーに師事
- ◇ 41年 福岡教育大学教授
- ◇ 59年 福岡教育大学学長
- 平成2年 福岡教育大学学長任期満了(二期)
- ◇ 大分県立芸術短期大学学長、現在
- 昭和55年 福岡市文化賞受賞
- 昭和30年 九州交響楽団常任指揮者
- 昭和56年 他 東京交響楽団、大阪フィルハーモニー、豊橋響、熊本響、長崎響を指揮し現在に至る。



西森 由美(にしもり・ゆみ)  
ソプラノ



熊本県生まれ、東京芸大に学ぶ。二期会オペラスタジオ第28期生を最優秀賞及び川崎静子賞を受賞して修了。また、オペラ研修所の第5期生を修了。原田茂生、菊池初美の両氏に師事。「魔笛」のパミーナ、「コシ・ファン・トゥッテ」のフィオルディリージ、「ドン・ジョヴァンニ」のドンナ・アンナ、「フィガロの結婚」のバルバリーナ等、モーツァルトの音楽の純粋性を、その清潔で美しい声で表現してきた。さらに文化庁こども芸術劇場「ヘンゼルとグレーテル」ではグレーテル、今回の「タンホイザー」では牧童と、魅力的な女性から純真な子供までを演じ分ける力を持つ。オペラに賭ける情熱はひとかたならぬものがあり、88年6月の「ペレアスとメリザンド」ではメリザンドを、12月「ヘンゼルとグレーテル」ではグレーテルで出演。

二期会会員

木村 宏子(きむら・ひろこ)  
メゾ・ソプラノ

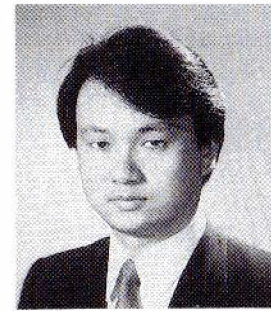


東京芸術大学卒業。  
関 種子、佐々木成子に師事。  
1957年、文化放送音楽賞受賞。  
1959年「フィガロの結婚」のケルビーノでオペラにデビュー。美しい声と広い声域、豊かな音楽性と表現力を持ち、その後「椿姫」のフローラ、「ロング・クリスマス・ディナー」(ヒンデミット)のジュネビエーブ、「ラインの黄金」のフロースヒルデ及びウォークリンデ、「蝶々夫人」のスズキ、「こうもり」のオルロフスキー、「ナクソス島のアリアドネ」(R. シュトラウス)の作曲家、「ファウスト」のジーベル、などを歌っている。  
他方コンサートの分野でも我が国第一級のメゾ・ソプラノ歌手として高い評価を得ており、1959年から5年間N響のベートーヴェンの「交響曲第9番」のソリストとして連続して出演したのをはじめ、主要交響楽団との協演により、「レクイエム」(モーツァルト・ヴェルディ)、「メサイア」(ヘンデル)、「クリスマス・オラトリオ」(バッハ)、「変ホ長調ミサ」(シューベルト)他、多くの曲を演奏しており、この分野においても不可欠の存在となっている。

また、'74年の「毎日ソリスト」で'78年6月に行なったリサイタルでは、ドイツ歌曲の神髄に迫り絶賛をあびている。1982年には「デイドとエネアス」の名演唱によってウィンナ・ワールド・オペラ賞を受賞。昭和60年度 芸術祭賞受賞

二期会会員

田中 誠(たなか・まこと)  
テノール



国立音楽大学声楽科卒業。同大学院オペラコース修了

在学中に名指揮者オトマール・スイトナー指揮、演出によるヘンデルのオペラ「アチスとガラテア」のアチス役で出演以来、モーツァルトの4大オペラチマローザ「秘密の結婚」(M. ハンペ演出)の他、一期会公演ベルク「ヴォツェック」、ビゼー「カルメン」、日生劇場オペラシリーズ、ウェーバー「魔弾の射手」ブッチーニ「蝶々夫人」、東京室内歌劇場、ピッチーニ「チェッキーナ」青山劇場オペラ、ニコライ「ウィンザーの陽気な女房たち」等に主役で出演好評を博す。また、ベートーヴェン「第九」、モーツァルト「レクイエム」ショスタコーピチ「森の歌」、グノー「聖チェチリア荘厳ミサ曲」、ハイドン「テレジアミサ」等の独唱者としても多くのコンサートに参加。最近ではモンテヴェルディ「オルフェオ」、カリッシミ「ヨナ」、F. カッチーニ「ハッジエーロの救出」(コンパクトディスク発売)等、初期バロック音楽の分野にもレパートリーを広げている。

二期会会員 国立音楽大学音楽研究所研究員

宮原 昭吾(みやはら・しょうご)  
バリトン



東京芸術大学卒業。1963年、同大学院在学中にドイツ政府給費留学生としてベルリン音楽大学に留学。'68年、ベルリン音楽大学卒業。中山悌一氏、エリザベート・グリュンマー女史に師事。'63年、毎日音楽コンクール第1位。'67年国際シューベルトコンクール第1位(ウィーン)、『68年国際オラトリオコンクール第2位(グラーツ)、同年ドイツリートコンクール第1位(シュトゥットガルト)、『69年ミュンヘン国際音楽コンクール第2位受賞。'65年よりベルリンを中心にヨーロッパに於いて数々のコンサートに出演し、ベルリン・フィルをはじめ多くのオーケストラと協演し輝かしい実績を残した。

'72年に一時帰国し、二期会公演「ワルキューレ」のヴォータンでオペラデビューを飾り、'76年秋から西独ハイデルベルク歌劇場と専属契約を結び、「ドン・ジョヴァンニ」のドン・ジョヴァンニ、「カルメン」のエスカミーリョ、「フィガロの結婚」のフィガロ、「仮面舞踏会」のレナート、「ボエーム」のマルチェロ、「ファウストの劫罰」のメフィストなどをレパートリーとして活躍し'80年帰国。その後も「ニュールンベルグのマイスタージンガー」のベックメッサ、「ファルスタッフ」のタイトルロール、「椿姫」のジェルモン、「ペレアスとメリザンド」のゴロー、「ナクソス島のアリアドネ」の音楽教師、「真夏の夜の夢」のオペロン、「魔弾の射手」のカスパールを歌うなどオペラでの活躍とともにオラトリオ、リサイタルなどのコンサートの分野でも貴重な存在である。

二期会会員



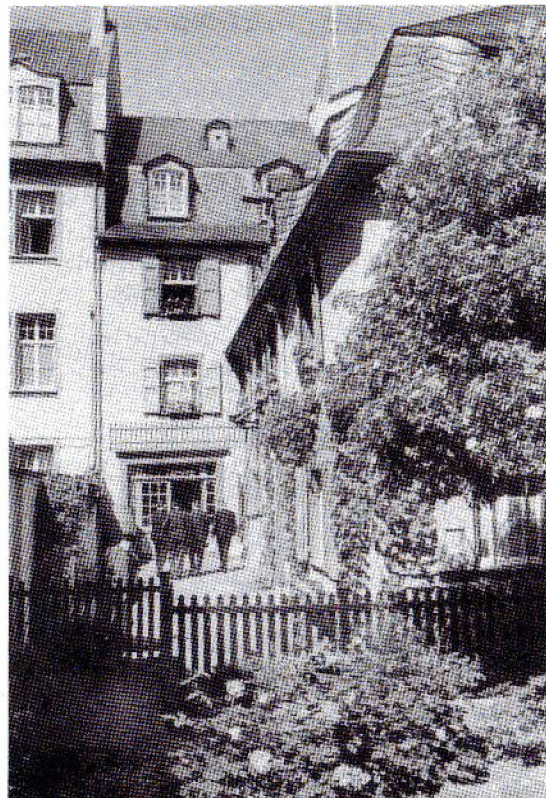
## 1. エグモント序曲 作品84

ベートーヴェン

## 2. 交響曲第9番二短調作品125「合唱付き」

ベートーヴェン

- 第1楽章 Allegro ma non troppo, un poco maestoso  
第2楽章 Molto vivace  
第3楽章 Adagio molto e cantabile  
第4楽章 Finale



ベートーヴェンの生家（ボン）

ベートーヴェンは1770年12月16日、ドイツのボンで生まれた。1970年にはベートーヴェンの生誕200年を記念した様々な催しが全世界で行われた。

ボンで行われた“第九”の演奏会には日本からもある大学の合唱団が参加した。その演奏会の模様がラジオで中継されると、ボン中の人々は自分の家のラジオのボリュームを一ぱいに上げて、窓辺に外へ向ってそのラジオを置いたという。

ボン中にベートーヴェンの“第九”が鳴り響く様子を思い浮かべると、実に壮観で感動的であったに違いない。同時に、ボンの人々のベートーヴェンを誇りに思う気持と愛する気持が手に取るようにわかる。



ライン河の埠場から眺める対岸のボン市全景 1800年頃

### 熊本での第九

毎年12月の末に第九シンフォニーが演奏されてきましたが、今年は第10回となりました。

第九の第10回という語呂合わせの感も致します。

熊本で第九が演奏されるようになったのは何時からか？記憶がはっきりしませんが、多分終戦後間もない頃、東京芸術大学のオーケストラ合唱団が来熊して今の市民会館の所にあった公会堂で演奏されたように思います。然し古老の話によると、大正のはじめ第一次世界大戦でドイツ軍の捕虜を藤崎宮の参道の中程に収容所を作り多くのドイツ兵を収容しておりました。私も子供の頃見物に行ったことがあります。

そこばかりの会費を払うだけで、この見事なコンサート、ホールで「第九」が歌えるなど、歌い手冥利につきます。「歌い手」などと書くと何を勘違いしているのかと笑われるにきまっていますが、どうしてどうして本人は立派にその気なのです。

第四楽章一。薄暗かった舞台が徐々に明るさを増し、やがてまぶしいまでの光に包まれるその一瞬の高揚。ライトも聴衆の視線もまるで自分だけに当てられているようなたかぶりは、感覚的には完全に一流ミュージシャンのものなのです。もっとも実際には、客席の娘が「お父さんはどこに居たの？」と尋ねるほど小さな存在にすぎないので

他の都市では盛んに第九が歌われているのに、熊本ではなかなかそのチャンスがない——そういったジリジリした気持ちをふっとばすように、10年前熊本で第九が始まったとき、私は飛びあがるような気持で第九の楽譜を手にしたものです。

若い人達と一緒に、しかもドイツ語——不安はもとより一杯でしたけれど、第九への思いは止みがたく、その後は夢中で練習に入りました。家事の合間に楽譜を開いてみたり、台所でお鍋を片手にカセットテープを聞きながら一緒に歌ってみたり、ともすると夢の中にまでドイツ語がはいりこんできたり、文字どおり朝から晩まですっかり第九、第九で明け暮れたものでした。

九州女学院短期大学名誉教授 梅沢信一

その兵士達が色んな楽器を持っていて第九シンフォニーを演奏していたとの事で、若しこれが本當なら熊本での最初の演奏でしょう。第九には合唱もあり、ドイツ兵だけでは演奏出来ないので、演奏されたとしても曲の一部であったと思います。

第九が年の暮に全国で演奏されるは何故だろうか。勿論名曲であり大曲であるからでありましょうが、或る作曲家の座談会をラジオで聞いていたら、作曲法的に見ると大した曲ではないとの説になりました。それでも結論としては日本中の何万何千の人々に感動を与えていることを思えば、やはり名曲と言うべきかとのことでした。

合唱団員 仙波洋八

すが……。

「第九」はこれまで何回となく歌い続けてきましたが、歌えば歌うほどその奥行きを思い知らされ、完璧に歌えたと思ったことはまだ一度もありません。おそらくこれからもそうでしょう。しかしそうであっても、今年は第10回の演奏会。かつての粗々しい石ころに過ぎなかった私たちが、10年の歳月に磨かれてどこまで珠となり得たのか、もとより自信はないにしても、「熊本第九」の10年の歴史の重さにふさわしい演奏ができることを、ひたすら念じて、今宵ステージにあがります——。

合唱団員 亀丸直美

あれから10年。毎年欠かさず参加しているのですが、県内のあちこちから駆けつけられる多くの人達——年齢も職業もさまざまに異なった人達と、心をつにして声を出し合い、素晴らしいハーモニーを創り出し得た時の感動はたとえようもなく、そしてそれはまた次の機会の勇気と励ましとなっていくのです。

すっかり熊本の音楽文化財として定着した熊本の第九。今年もまた歌を愛する仲間が県立劇場の素晴らしいホールに歌声を響かせるために集まって参りました。私たちはこれからも声の続くかぎり、いつまでも私たちの第九、熊本の第九を歌い続けたいと思います。



1. エグモント序曲 作品 84  
ベートーヴェン

史上に実在したラモラル・エグモントは1522年の11月18日に生まれ、1568年の6月5日に処刑されたオランダの貴族の出の軍人、政治家であり、オランダ独立の礎ともなった人である。ゲーテはこの史実をもとにして、エグモントを主人公にした悲劇を書いた。ウィーンの宮廷劇場の支配人ヨーゼフ・ハルトルはこの「エグモント」を、ウィーンで初めて上演するために、その音楽をベートーヴェンに依頼し、ベートーヴェンはこれを1809年の暮から翌年にかけて作曲した。

曲は、序奏をもったソナタ形式によって書かれているという点において、ベートーヴェンの他の多くの序曲に共通するものをみせている。序奏はソステヌート・マ・ノン・トロppo、ヘ短調、3/2拍子のかなり自由な幻想的なものであり、そのおわり近くでは、主部の予備がなされ、そのままアレグロ、3/4拍子の主部に流れこむ。しかし、主題の動機は、序奏と主部とを含めて、それぞれにきわめて強い関連性をもっており、展開部は短いが全体的に充実した構成をみせている。そして短い和声的な接続部分をおき、最後は、アレグロ・コン・プリオへ長調、4/4拍子の晴れやかで勇壮でもあるコーダにはいり、気分を一変して曲とする。



ベートーヴェン

1818/19年、フェルディナント・ツモン原画によるエドワード・アイヘンスの銅版画。

2. 交響曲第9番 二短調作品125「合唱付き」  
ベートーヴェン

ベートーヴェンは、一つ一つが内容と性格を異にする八つの交響曲を書き終えたのち、生涯の最後に、九番目の交響曲に着手した。

1793年に、ボンのフィッシェニヒは、シラー夫人に手紙で「彼は歓喜をも、しかも各節残らず作曲するでしょう……」と告げていることにより、ベートーヴェンは生地ボンにいたときから、すでにシラーの詩「歓喜に寄す」に作曲したいと思っていたことがわかる。

1822年に、ロンドンのフィルハーモニー協会は、ベートーヴェンに新しい交響曲の作曲を依頼してきた。このことで、今までベートーヴェンの頭の中に、うかんだり、消えたりしていた合唱付きの交響曲の構想が、いっきよに実現することになった。そして1823年から24年にかけて、この巨大な交響曲が完成した。シラーの「歓喜に寄す」に作曲する意図をいだいて、完成するまでに、じつに30数年にわたっていることになる。

この曲は、ベートーヴェンの音楽における技法と精神の最も円熟した時代の作品であって、その内容が雄大な精神と、大胆にして洗練され、全く独創に富んだもので、いく多の目新しい技法がそこに示され、その楽想は当時の常識を全く超えたものであった。四人の独唱者や大規模な合唱団を用いたり、終曲の初めにおいて、前の三つの楽章を回想したりなどはその一例である。

初演は1824年5月7日夜、ウィーンのケルトナートア劇場で行われた。

ベートーヴェンの聴力がかなり衰えていたことは、この曲の初演の際に、指揮者を二人おいたことでもわかる。ベートーヴェンは正指揮者のウムラウフの隣りにあって、実際の演奏とは、くい違ったテンポや表情で空しく空間に弧を描くのみであったという。

「第九」の演奏は練習不足ではあったが、聴衆には偉大な感銘を与え、各楽章の終りには万雷の如き拍手が起った。特に終曲が終わったとき、成功は決定的となった。満堂の聴衆は感激して総立ちとなり喝采を浴びせた。しかし、耳の聞こえないベートーヴェンは聴衆を背にしてボンヤリしていた。見かねたアルトの独唱者ウンガーがかれの袖をひいて聴衆の方を向けたので、かれは初めてこの曲が非常な感銘を与えたことを知り、礼をしたという。聴衆はこの劇的な悲愴な光景に感激し、さらに拍手を続けて、作曲者を五度も答礼のためにステージに出させた。答礼は三回というのが皇帝に対する礼儀なので、警官があわてて聴衆を制したという。

【第一楽章】 Allegro ma non troppo, un poco maestoso

「第九」の規模の雄大さと、劇的な性格は、はやくもこの楽章でも示されている。導入は、天地の混沌を想わせる茫漠とした空5度（第三音がない）の響きで始まる。やがてこの響きのなかから鋭いリズム・モチーフが生起する。このモチーフが圧縮され、第1主題が澎湃（ほうはい）として湧きおこる巨大な塊のごとく聳然（しょうぜん）たる姿をあらわす。ソナタ形式は、いまだかつて、このような主題の出現を経験したことがなかったのである。

第2主題は第1主題と異って、楽しい性格のものである。これにつづく部分も、大体においてこの気分をもち、ときどき第1主題の部分をまじえながら展開部へとつづく。そしてその劇的雄大さは再現部における第1主題への壮烈な導入において、クライマックスに達する。

ワーグナーによると「我々と地上の幸福との間をさえぎる敵意ある暴力の圧迫に対して、喜びを勝ち得ようと努める魂の戦い、極めて壮大な意識で把握された戦いが、この第一楽章の基礎をなしているように思える」である。

【第二楽章】 Molto vivace

およそベートーヴェンの書いたスケルツォのなかで、最も大規模なものである。鋭い付点リズムを含む、むしろ単純なスケルツォ楽想が、およそ考えうる限りのすべての展開を行う。トリオの主題はあきらかに第一楽章のエピソードから受けつがれたものであり、終楽章の「歓喜の調べ」への橋わたしの役を果すことにもなるのである。

ワーグナーは「激しい喜びが、この第二楽章のはじめのリズムで直ちに我々をとらえる。新しい世界の中に我々は入り、そこで陶酔や麻酔へと駆りたてられるからである……」と言っている。

【第三楽章】 Adagio molto e cantabile

讃歌ふうの主題旋律と希望と浄化を象徴するよ

うな明るく美しい第二主題、この両主題にもとづく自由な変奏形式をとっており、叙情的な旋律、色彩的な和声は、宗教的な敬虔さをもって瞑想的に展開され、情熱も闘争もない平和な幸福感が描き出される。

この交響曲の中での一つの頂点であり、ワーグナーは「なんと清らかに天国のようななだめ方でそれ等の音は反抗と絶望におののいた魂のはげしい促しを、やわらかい憂鬱（ゆううつ）な感覚へと溶けさせて行くことが、思い出がつとに享受したきわめて純粋な幸福への思い出が目ざめるかのように思われる…」と言っている。

【第四楽章】 Finale

第1呈示部＝まず管楽器によるあわただしい楽想が奏される。これに対し低弦がレシタティブでこたえる。それから、前の三つの楽章がそれぞれ回想され、低弦のレシタティブによって否定されていく。そしてついに、一つの歓ばしい旋律が現われる。この主題は初めに低弦によって歌われ、くり返しながら全合奏に至る。

第2呈示部＝この楽章の初めの、あわただしい楽想がもどってくる。やがてバリトン独唱が、力強く歌いはじめ、ついで合唱がそれにつづく、やがて他の独唱も加わり、ひとつのクライマックスをつくる。曲想一転して行進曲となり、テノール独唱が歌いはじめる。そして男声合唱が、力強く歌いくわわる。

再現部＝やがて曲はふたたび「歓喜の調べ」がもとどり、合唱が重々しく新しい主題をうたう。やがてこの新しい主題と「歓喜の調べ」とが組合わされて、壮麗な二重フーガがくりひろげられ、全曲中の一つのクライマックスを形づくる。

コーダ＝曲想が一変する。主題旋律の新しい変奏に入り、四人の独唱者と合唱が変化のかぎりをつくして、交互に歌いすすめる。

圧倒的な合唱コーダとなり、合唱の最後は、マエストロとなるが、管弦楽だけが残り、圧倒的な終結を一気に終る。

「県民第九の会」実行委員会

(50音順)

有馬 俊一 草刈 秀克 黒葛原 潔 本山 洋  
(実行委員長)  
江橋 克己 下田 宰城 林原 隆治 山崎 崇伸  
神田 一伸 田北 洋康 藤枝 昭俊(故)







# 熊本交響楽団

KUMAMOTO SYMPHONY ORCHESTRA

## 〈コンサートマスター〉

山崎 崇 伸

## 〈1stヴァイオリン〉

阿波 和 江

東 恭 子

井上 あかね

桂 敦 子

古泉 晃 子

古閑 文 子

高木 範 貢

武谷 脇 子

龍野 珠 美

田野 育 美

黒葛原 契 子

長坂 浩 子

原 雅 子

福島 幸 代

山崎 崇 伸

## 〈2ndヴァイオリン〉

上田 萬 二

上野 暢 子

岡 純 子

草野 正 夫

佐藤 弘 美

佐美三 治 子

高木 信 雄

竹村 朋 子

中村 郁 子

東 真 知 子

広瀬 晶

松岡 千 平

本山 洋

山下 晃一郎

柚原 三弥子

## 〈ヴィオラ〉

芦田 由香理

荒木 拓 実

上田 恭 子

緒方 肇

清元 晃

草場 立太郎

国府 慶 作

甲田 啓 子

洒 旬 紀 子

土野 優

徳永 義 治

飛嶋 なぎ

水田 剛

宮下 孝之

吉田 美智子

渡辺 精 一

## 〈チェロ〉

安達 信 一

片山 玲 子

川瀬 順

高木 成 子

高濱 秀 光

津田 一 彦

槌田 博 文

長尾 和 治

長坂 輝 喜

広瀬 瑞 穂

本田 義 信

三浦 純 子

宮崎 すみれ

## 〈コントラバス〉

古泉 俊 彦

國米 稔

後藤 誠 司

重田 まゆみ

田上 博 子

中川 裕 司

平川 和 秀

## 〈フルート ピッコロ〉

後藤 美奈子

竹原 千 恵

山口 邦 子

## 〈オーボエ〉

片岡 久 哉

辰野 裕 昭

宮本 千 草

## 〈クラリネット〉

原 敏 郎

平山 裕 二

保田 明 子

前野 美 千 代

## 〈ファゴット コントラファゴット〉

蒲池 麻 紀

黒田 孔太郎

高木 群 之

蓮沼 昇

小林 太 郎

## 〈ホルン〉

伊藤 友 美

黒葛原 潔

猿渡 伸 之

原田 光

安松 真 司

山口 亮 二

## 〈トランペット〉

市原 彰

豊田 恭 司

堀江 幸 司

## 〈トロンボーン〉

書川 欣 也

小多 崇

鍋島 靖 夫

原田 勝 徳

## 〈打楽器〉

金坂 義 徳

島崎 猛 雄

白尾 友 宏

福島 好

# 県民第九の会演奏会記録

※は同時演奏曲

## 第1回 昭和57年12月28日(火)

指揮 山田 一雄

独唱 新 圭子 木村 宏子 伊津野 修 高橋 修一

※越天楽(雅楽)……………近衛 秀 磨(編曲)

## 第2回 昭和58年12月11日(日)

指揮 大友 直人

独唱 高見久美子 岡 ますみ 大野 光彦 柴田 啓介

※歌劇「ニュルンベルグのマイスタージンガー」前奏曲…………ワーグナー

## 第3回 昭和59年12月27日(木)

指揮 山岡 重信

独唱 中沢 桂 木村 宏子 板橋 勝 池田 直樹

※弦楽のためのアダージョ 作品11……………バーバー

## 第4回 昭和60年12月25日(水)

指揮 フランティシエック・ワイナール

独唱 三縄みどり 妻鳥 純子 伊達 英二 中村 邦男

※レオノーレ序曲第3番 作品72……………ベートーヴェン

## 第5回 昭和61年12月27日(火)

指揮 荒谷 俊治

独唱 津下美奈子 木村 宏子 鈴木 寛一 芳野 靖夫

※トッカータとフーガ 二短調……………バッハ〜ストコフスキー

## 第6回 昭和62年12月26日(土)

指揮 安永武一郎

独唱 中沢 桂 木村 宏子 近藤 伸政 栗林 義信

※エグモント序曲 作品84……………ベートーヴェン

## 第7回 昭和63年12月25日(日)

指揮 安永武一郎

独唱 三縄みどり 木村 宏子 鈴木 寛一 平野 忠彦

※序曲「コリオラン」ハ短調 作品62……………ベートーヴェン

## 第8回 平成元年12月24日(日)

指揮 小松 一彦

独唱 秋山恵美子 木村 宏子 成田 勝美 高橋 啓三

※序曲「プロメテウスの創造物」序曲 作品43……………ベートーヴェン

## 第9回 平成2年12月23日(日)

指揮 粉山 和明

独唱 山田 綾子 木村 宏子 大野 徹也 福島 明也

※「ロザムデ」序曲 作品26 D 797……………シューベルト

## 第10回 平成3年12月23日(月)

指揮 安永武一郎

独唱 西森 由美 木村 宏子 田中 誠 宮原 昭吾

※エグモント序曲 作品84……………ベートーヴェン